

# 琵琶湖周辺内湖におけるホンモロコ・ニゴロブナ 2cm 種苗の放流効果

(平成 29 年度～令和 3 年度調査まとめ)

菅原和宏・森田尚・孝橋賢一・大澤宏史・岡本晴夫

## 1. 目的

琵琶湖周辺の内湖を増殖場として利用し、地域の水産資源として育成するため、33 の水面から事前調査により増殖場として機能する可能性が高いと考えられる 4 つの内湖において、平成 29 年からホンモロコとニゴロブナ稚魚を放流し、放流翌年以降に放流した内湖へ産卵回帰するかを調べてきた。今回は平成 29 年度～令和 3 年度まで実施した本調査の結果をまとめ、内湖の増殖機能を評価した。

## 2. 方法

水産試験場で採卵ふ化して育て、ALC で耳石標識したホンモロコおよびニゴロブナ 2cm 種苗を 7 月に各内湖に放流した。各内湖に放流した両魚種の尾数は表のとおりである。放流翌年以降の 5～7 月に小型定置網 1 統を各内湖に設置し、産卵回帰親魚の捕獲を試みた。

## 3. 結果

各年度において小型定置網で採捕した放流魚の尾数を表に示した。ホンモロコの産卵親魚は湖北野田沼と乙女ヶ池で確認され、その多くは採捕された前年に放流した群 (1 歳魚) であった。貫川内湖と松ノ木内湖では、ホンモロコ産卵回帰親魚が全く確認されなかった。ニゴロブナの産卵回帰親魚については、令和 2 年度に湖北野田沼において平成 30 年度放流群 (2 歳魚) が 3 尾のみ確認された。

このことから、産卵回帰するホンモロコはその多くが 1 歳魚であることが明らかとなった。湖北野田沼と乙女ヶ池ではホンモロコの増殖機能を有することが確認できた。一方、ニゴロブナは産卵回帰するまで数年かかることから、放流効果の確認が難しいと思われた。貫川内湖と松ノ木内湖では増殖機能を確認できなかったが、その原因を特定することはできず、また栄養塩・餌料環境からも内湖の増殖機能を規定する要因は見いだせなかった。

表 各年度におけるそれぞれの内湖に放流したホンモロコとニゴロブナの尾数と、放流翌年以降に放流した内湖において小型定置網で採捕された放流魚の尾数.

放流年度	内湖名	魚種	放流尾数	各年度において小型定置網で採捕した放流魚の尾数			
				H30	H31	R2	R3
平成29年度	湖北野田沼	ホンモロコ	37,900	0	8	0	0
	貫川内湖		45,000	0	0	0	-
	乙女ヶ池		41,000	1	0	0	0
	湖北野田沼	ニゴロブナ	39,500	0	0	0	0
	貫川内湖		39,300	0	0	0	-
	乙女ヶ池		33,900	0	0	0	0
平成30年度	湖北野田沼	ホンモロコ	59,500	-	79	3	0
	貫川内湖		54,100	-	0	0	-
	乙女ヶ池		55,900	-	23	5	0
	湖北野田沼	ニゴロブナ	88,700	-	0	3	0
	貫川内湖		118,300	-	0	0	-
	乙女ヶ池		113,600	-	0	0	0
平成31年度 (令和元年度)	湖北野田沼	ホンモロコ	73,200	-	-	10	0
	貫川内湖		79,900	-	-	0	-
	乙女ヶ池	76,000	-	-	29	0	
	湖北野田沼	ニゴロブナ	39,400	-	-	0	0
貫川内湖	42,600		-	-	0	-	
令和2年度	乙女ヶ池		41,000	-	-	0	0
	松ノ木内湖	ホンモロコ	171,000	-	-	-	0